

RPSJ NETWORK

Railway Preservation Society of Japan

日本鉄道保存協会 会報
2000 MARCH 第4号

「鉄道の日記念」イベント・歴史的車両の動態保存に関するシンポジウム 「歴史的車両の動態保存と魅力ある地域づくり」



財団法人日本ナショナルトラスト事業課長

米山淳一

全国各地で蒸気機関車の復活運転が華やかにおこなわれている。NHKの朝の連続TVドラマでもお茶の間に毎日のように蒸気機関車の勇姿が映り、より親しみやなつかしさを抱かれたかたも多いと思う。これに気をよくしたJR北海道では「すずらん号」と名付けられたイベント列車を夏から秋にかけて運転し好評を得ている。

以前は、蒸気機関車を代表とする歴史的な鉄道車両が単に鉄道を愛する人々の対象だけであたが、文化財としての指定や動態保存をすすめることによって、欧米にならった産業文化遺産的な位置づけを明確にされるようになるとともに近年では、地域振興や地域づくりの核、あるいは、観光資源として活用される新たな方向付けも生まれた。

当財団(JNT)が事務局を担当している日本鉄道保存協会では、このような状況をとらえ、運輸省鉄道局のご指導のもと「鉄道の日記念」イベントのひとつとして、歴史的車両の動態保存等に関するシンポジウム「歴史的車両の動態保存と魅力ある地域づくり」を開催し、講演の各先生、パネリストの皆さんのお話しを通じ、蒸気機関車を含めて歴史的車両の動態保存が、鉄道を愛する人々だけの対象から、地域の振興や町づくりの核として位置づけられ、観光資源として広く活用されている状況が明確となった。

地域の宝や誇りとして一般でいう文化財と同じような視点に立った場合、未永い保存と活用を推進するならば、市民、行政、専門家そしてJNTをも含めたNGO的な団体が力を合わせて取り組む必要が大いにあると考えている。

「鉄道の日記念」イベント・歴史的車両の動態保存に関するシンポジウム

「歴史的車両の動態保存と魅力ある地域づくり」

【日時】平成11年10月13日(水)午後6時～8時45分

【場所】東京銀座・ガスホール

【主催】日本鉄道保存協会

【後援】「鉄道の日」実行委員会

財団法人日本ナショナルトラスト

【プログラム】

開会挨拶

日本鉄道保存協会 顧問 松澤正二

スライド「世界の保存鉄道」

トラベルライター 白川 淳

講演

「イギリスに学ぶ歴史的車両の保存と活用」

東京女子大学 教授 小池 滋

講演

「我が国における歴史的車両の動態保存の社会的状況」

駿河台大学 教授 青木栄一

お話し会

「歴史的車両の動態保存と魅力ある地域づくり」

大井川鉄道株式会社 社長 山下 武

加悦鉄道SL広場 管理部長 篠崎 隆

山口線SL運行対策協議会 山口県商業観光課長 岡田 実

箱根町教育委員会生涯学習課 副主幹 伊藤 潤

(財)日本ナショナルトラスト 事業課長 米山淳一

質疑応答

閉会挨拶

日本鉄道保存協会代表幹事団体

(財)日本ナショナルトラスト 理事 増田浩三

シンポジウムの概要

鉄道の日の前日、平成11年10月13日(水)の夕方6時から8時45分まで、東京・銀座のガスホールで「歴史的車両の動態保存と魅力ある地域づくり」をテーマに日本鉄道保存協会主催のシンポジウムが開催され、筆者も参加する機会を得た。すでにこれについてはJNT事務局米山淳一事業課長による報告が会報 No. 369(1999年11・12月)に掲載されているが、ここでは産業考古学を学ぶ一学徒の立場から、当日のシンポジウムの様子を簡単にまとめてみたい。なおシンポジウムの内容は、スライド上映、講演(2件)、パネリスト4名によるお話し会の4つであった。これらについて以下に概要をまとめてみる。

1) スライド上映

トラベルライターの白川淳氏により、オーストラリアとニュージーランドを中心とした保存車両と保存鉄道の現状紹介が主体で、あわせてイギリス、スイス、アメリカ、インドなどの事例も紹介された。スライド枚数はか



オーストラリア・アデレード近郊のステイムレンジャー鉄道で運転中の520号

堤 一郎 (産業考古学会・理事)



シドニー近郊のジグザグ鉄道

なり多く、いずれも美しい風景とともに保存される車両(そのほとんどが動態保存)を取り上げたものであった。一通りスライドを見ての感想は、わが国は鉄道車両保存の面ではやはり数段遅れをとっていること、先人達の技術遺産である鉄道車両の文化的価値と保存の意義を人々にどのように理解させ、いかに定着させたら良いかという課題であった。これは産業考古学が目指す産業遺産の保存と記録、調査・研究と遺産の活用とも密接に関わっている。スライドの解説をしながら、白川氏がいくつか提言をしていたことが印象に残った。

2) 講演(1)

「イギリスに学ぶ歴史的車両の保存と活用」:東京女子大学の小池滋先生による講演で、鉄道車両保存については先駆的存在であるイギリスでの事例を通して保存に係る様々な課題とその解決策を提示されたのは意義あることであった。その一つは、基本的に保存活動というものは市民(趣旨を共有する個人や団体)レベルでおこなうもので、国や地方公共団体などの援助を



あてにせず時間と情熱を味方にしてできる範囲で地道にそれを継続させる姿勢が大切であること、もう一つは一般市民に積極的に働きかけ、一般受けするイベントやグッズなどの企画商品进行を考案し、自らが資金集めをして保存活動の継続をはかることである。こうした試みはわが国では大井川鉄道で、人気キャラクターのついでSL列車運転などで実施されている。こうした民主的な心ある人々による保存活動がイギリスの基本的姿勢なのだろうが、他力本願志向が強いわが国にこうした方法をそのまま持ち込むことはなかなか難しい点もあるように思われる。

しかしJNTによるトラストレインがすでに10年を経過している現状からすれば、わが国においても少しずつではあるが保存という地道な活動が社会的に評価され、継続の可能性がでてきたとも言えるだろう。一般に、保存活動とそれに係る事業は社会の経済事情と密接な関わりを持つが、経済レベルの現状を維持しつついかに保存活動を継続させていくかが保存団体のみならず学会の課題にもなっている。わが国においても、イギリスの事例のように心ある人々による車両や鉄道の保存が継続可能な社会の形成が大いに期待され、私たちもできるところから積極的に参加する必要性を改めて感じた。

3) 講演 (II)

「我が国における歴史的車両の動態保存の社会的状況」：駿河台大学の青木栄一先生による講演で、作成されたレジュメに従って話が展開されたが、車両や鉄道の保存事例に関する文献と事例を取り上げながら、日本鉄道保存協会設立に至るまでの歴史を概説した。話しの中で取り上げられた博物館明治村での京都市電運転(1967年)や尾西鉄道蒸気機関車運転(1974年)、梅小路蒸気機関車館開館(1972年)、大井川鉄道でのSL急行列車運転(1976年)などが、現在も変わらず継続されていることは誠に喜ばしい。さらに鉄道史研究の分野では、今日に至る研究の基礎がアマチュアである鉄道愛好者による長年の調査で築き上げられ、この成果を鉄道史や産業考古学の研究のみならず保存にも十分活用する必要があること、車両や鉄道の動態保存をおこなうためには機関車のみならず客貨車や施設・設備などを体系的に保存する必要があること、今後の保存活動を定着させるには学校教育の中で産業遺産の持つ意味を子供達に教える、その前提として教師向け教育をお



こなう必要があることなどを強調された。これらは車両や鉄道の保存は、社会的視野に立っておこなう必要があるということであろう。これらはいずれも鉄道保存の今後にとって、個人的レベルとは別に社会的視点に立って考えなければならない大切なことがらといえよう。

4) お話し会

休憩の後、4人のパネリスト(大井川鉄道・山下武氏、加悦SL広場・篠崎隆氏、山口線SL運行対策協議会・岡田実氏、箱根町教育委員会・伊藤潤氏)とJNT・米山淳一氏(司会者)によるお話し会が1時間にわたっておこなわれた。始めに4人が簡単に歴史的車両の持つ魅力について語った後、スライドを使って自らが関わる歴史的車両や保存活動を中心に事例に基く解説がおこなわれたが、これは興味深い内容であった。とりわけ、歴史的に意義ある車両の魅力を維持するために必要な整備や保守・補修作業はほとんど目立たない存在にも関わらず、実は大変重要な仕事である点が共通認識であった。特に動態保存では使用原動機や機械部品などの調達をいかにおこなうか、そうした技術・技能を人を通していかに継続させるかが今後への課題である。また周辺の景観や観光スポットなどと保存車両をいかに有機的にリンクさせ、経営に還元させるかなど、技術文化遺産の保存・活用と経営との関わり、地域との遺産を通しての交流と連携などについての苦労と努力が披露され、さらにそうした活動を支えるボランティア組織の存在も話題にのぼった。

総じて、現状では歴史的車両の動態保存を継続することは事業主だけでは不可能な部分が多く、遺産に価値を認めた人々がそれを自らの宝あるいは誇りとして意識し、地域ぐるみでどのように保存を継続させるか、またそれを支える資金的背景と技術・技能面での裏付け、若い人々へのアピールと支持などが今後への大きな課題と言えよう。これらは産業考古学会の活動とも共通点を持っており、学術面はもとより保存活動などで支援できる場所があればご協力させていただきたいと思っている。

以上簡単ではあるが、シンポジウムの概要とさせていただく。日本鉄道保存協会の今後のさらなる活動の継続と発展を、心より期待したい。保存活動の継続はポテンシャルの蓄積につながり、それが次のステップへの大きな力になることを信じている。

WANTED SL前照灯の電球

大鉄技術サービス相談役 白井 昭

SL保存の各鉄道とも部品や過熱油など資材の入手に苦労しているが、現在大井川鉄道ではSL前照灯の球に困っている。

どこも作ってくれないのである。シールドビームにすればよいが、それでは歴史保存にならないし、値打ちがないので正統な前照灯を残したい。

その電球は32V、150Wの特種なベースなもので、全国各線SLではどうしているか、どこか作っている所はないか、共同発注できないかお尋ねしたい。

前照灯がつかなければSLは走れません。

32Vという電圧は今もアメリカに多く、何千両というニューヨークの地下鉄の制御回路は今も32Vである。アメリカ生まれの日本のED53、EF51も32Vでした。

これは電源がバッテリーフロートのため生まれたもの



SLの前照灯

で、一方日本の客車は24Vと異なっていた。客車はストーンの発電機からとも考えられるが、戦前日本のSLと客車は所管が違っていた。

今は山口線など客車の電源はDGによるACが多くなっているが、大井川線は今でも蒸気をもとに車軸発電機を回し、バッテリーと併用して点灯する原点を守っている、つまり火力発電なのである。このため終点につくと早々に電灯を消してしまう、これも昔のままである。

SLの32Vのルーツは知らないが、昭和始めSLにタービンを付け始めた時の川崎造船のタービンがなぜ32Vなのか、C52のアメリカ製に原点があるのかなど知りたい所である。



前照灯の電球と家庭用40W電球

平成12年度総会のご案内

日本鉄道保存協会の平成12年度総会は、8月31日(木)・9月1日(金)に京都府加悦町にある「加悦SL広場」で開催いたします。総会の会場は加悦鉄道の終着駅に隣接する町の施設「元気館」となります。

「加悦SL広場」はかつての加悦鉄道の鉾山駅跡に開設した施設で、創業当時から使用されてきた明治時代のSLや客車、貨車など23両の車両が展示されています。鉄道車両の見学のみならず、施設内で販売されているパンや客車を改造した「カフェトレイン」での飲食を目的として多くの家族が訪れ、賑わっています。視察では、同施設以外に加悦町の古い町並みと古墳公園、また最近、地元で注目をされている工芸の里などを見学します。

詳しいご案内は6月下旬頃させていただきます。今年も多くの方のご参加をお待ちしております。

